

NORTHERN OWLS

北海道美術館学芸員研究協議会

VOL. 10

1999.7

■発行
北海道美術館学芸員研究協議会
「NORTHERN OWLS」第10号
北海道美術館学芸員研究協議会
事務局／北海道立近代美術館内
札幌市中央区北1条西17丁目
TEL 011-644-6881
FAX 011-644-6885

【談輪】

武藤 忠氏

Tadashi Muto

学芸員と地域社会

釧路市民文化展実行委員会会長

どういう機縁であったのか、さだかには思い出せないが昭和53年の春、すでに物故されていた久本春雄画伯の業績をまとめようではないかという話があり、まったくの門外漢であるにも拘らず編集にたずさわった私は、やはり困りぬいた挙句の果て、道立近代美術館の門をくぐった。初めての“学芸員”との出会いである。それはまた、僥倖の一語につきる出会いでもあった。

私は、釧路市民文化展に長くたずさわってきたが、そんなことでこの私に「談輪」への一文を乞われた。そして軽い気持で引き受けたのだが……。

釧路市民文化展は昭和51年を初回として本年で24回目をむかえる。余りにも長きにわたって会長の席をあたため過ぎてきたことに、いささか恥じ入るおもしろいであるが、振り返ってみるとその間、無料展覧をつづけてきた本展を有料化に踏み切る際、はたして実行委内部や市民の賛同を得られるか、という悩みは意外にも案ずるは産むが易しであった。なんといっても大きな出来事は平成4年、釧路市生涯学習センターの開設に伴い館内に市民ギャラリーを併設、当時の行政の理解をやっとのことで得ることが出来、市で初めての美術館学芸員の決定をみたことであろう。

私には、短絡的にすぎるであろうがその地方が、この市が町が美術関係者のみならず研究者や学術関係者の必要とされる施設を有し、そこにたずさわる人々が住みついていけるかどうか、という事がその地方の文化度・生活することのアメニティーを判ずる大きな要素のひとつであると思っている。さいわい昨秋の道立釧路芸術館のオープンに伴い、人口20万人の中都市に4名の学芸員を有する都市となった。そのことの意義は大きい。

願わくば学芸員が自らの世間（世界に非ず）を広げ、知囊や耳囊をもっともっと大きくしてその地方を消化するならば、種々の企画を通して文化の向上に大きく貢献するであろう。

時あたかも未曾有の大不況がつづいている。美術館もまた、その影響をまっ先にそして大きく受ける。場合によっては負に向う変改を要求されるであろうが、今はやりのビックバンというタームは、決して経済や行政に限った用語ではない。学芸員自らも常套を捨て世間を広げてゆく努力をするならば、そこには理解と協力が待っている。

「格に入りて格より出ずる」という金言こそビックバンの基本である、と私は思うのだが。

NORTHERN OWLS VOL.10 INDEX

談輪／学芸員と地域社会 武藤 忠氏…………… 1

抄録／21世紀の創造的美術館像を求めて

廣瀬隆人氏…………… 2

報告／平成9年度研究協議会 浅川 泰…………… 4

研究ノート／野外彫刻の新たな試み

—公園を彫刻にする— 井上みどり…………… 5

研究ノート／美術情報コーナーの検索システム

吉崎元章…………… 7

研究ノート／ピカソ美術館を訪ねて——研修報告

釜沢恵子…………… 9

新設館の紹介／

北海道立釧路芸術館 地家光二…………… 11

新会員の館紹介／

市立函館博物館 霜村紀子…………… 12

網走市立美術館 古道谷朝生…………… 13

会員名簿・規約・役員…………… 14

21世紀の創造的美術館像を求めて

国立教育会館社会教育研修所専門職員

廣瀬 隆人氏

私は、現在、道教委からの出向のような形で、上野公園にある社会教育研修所に勤務しています。ここで、全国の生涯学習、社会教育関係職員のための研修事業の企画や各種の調査などを行っています。併せて社会教育主事講習や博物館学芸員の資格取得のための講習（博物館に勤務していて資格取得を希望する方のための講習）を実施しています。また、図書館が併設されており、博物館関係の文献も収集整理しており、全国の博物館の情報を収集し、閲覧に供しています。

管見の限りではありますが、博物館をとりまくいくつかの動向を紹介させていただきます。

① 阪神淡路震災、日本海重油流出事故以降、市民の非営利の社会貢献活動が大きく注目され、個人の趣味や社会奉仕といったイメージから社会的な意義や役割が大きく注目されはじめており、博物館ボランティアの諸活動もこうした一連の市民活動の一つとして位置付けられるものでしょう。これまでのように公共性の高い活動の多くは行政、営利活動は民間企業、といった二極的な社会構造から、新たに市民による非営利でかつ公共性を持った社会貢献活動が一定の役割を果たしていく社会への変化であるとも考えられます。NPOが法的整備を整え、我が国の社会を構成する主要なセクターとして位置付けられはじめています。ボランティア活動が私たちの生活の中でふつうのこととして取り入れられ、自立的な市民の社会参加の一つとして広がりを持っていくことは、高齢社会を支え、地域社会を活性化させていく上で欠かせないものとなるでしょう。

一般論ですが、博物館におけるボランティア活動は、博物館利用の一つの形態であるとする考え方があります。学習活動としてのボランティア活動ととらえる考え方です。したがってコーディネートする職員の配置が必要でし、博物館の業務として利用者と同じように「ボランティア」を考えるのです。その利用の仕方の一つに「クリッピング」や「解説」があるのでしょうか。さらに調査研究機能を持つ社会教育機関である博物館のボランティア活動は、より多様性を求めてボランティアが自ら調査研究し、学芸員の支援を得ながら研究報告を作成し、紀要を出していくことや、博物館と連携しての出版活動などが考えられて良いのではないのでしょうか。また、批判があっても、一定の年限の活動を機にそこから卒業したり、自立し、飛び立つボランティアという多様な形態が考えられて良いのではないのでしょうか。そして、また戻ってくることもあって良いのではないのでしょうか。さらに博物館の外で博物館ボランティアを進めることも可能でしょう。「まなぶ」ということは、「かわる」ということでもあります。歴史と伝統を引き替えに、新しい考え方や

新たな視点が排除されるとすれば、社会教育機関でボランティア活動を行うことの意味が問われることになります。

② 住民参加、市民参加ということ。これはずいぶん以前から様々な場面で指摘されていることなのですが、最近、その質が大きく変容しているようです。静岡県三島市をはじめとして、いくつかのまちではじめられている「グラウンドワーク」や道内でも少しずつ広がってきている「エコミュージアム」などにみられるように、行政に対する旧態然とした依存性を背景とした「役所は私たちに何をしてくれるのか」という意識から公共性と自立性、自己責任を背景とした「私にできることは何か、どんな貢献ができるのか」を考えていくことが住民参加であり、それは、地域社会に対する一定の義務と応分の責任を未来に向かって負担することでもあります。

こうしたことは、美術館と地域住民との関係にも照応されます。「美術館は何を見せてくれるのか」だけでなく、自分のまちの美術館は自分たちで育てていくという発想や欧米でしばしばみられるように（道立美術館の草創期にもみられましたが）地域の人々の寄附によって資料を収集する活動などが考えられて良いのではないのでしょうか。美術館は地域社会との関係を「教育普及・ボランティア」というカテゴリーに止まらず、美術館活動全体としての相互サービスということを考えていくことが必要ではないのでしょうか。美術館の諸活動を通じてこうした住民の意識変容を意図的、計画的に進めることが、美術館が社会教育機関であることの意味でありましょう。

③「生涯学習」ということ。多くの場合、「変化への対応」「生きがい」「豊かな人生」などという語句で説明されますが、では「社会教育」とどこが違うのか？税金使ってやることなのか？などの問いに答えられるのでしょうか。混乱に拍車をかけるだけの答申引き写しの言葉では十分に理解できないのです。

私は、生涯学習には大きく分けて二つの意味があると考えています。一つは、個人の生活の充実、成長、生きがいなどがあります。生涯学習は一人一人の生活を豊かにするという意味です。これまで我が国の生涯学習のイメージは、この部分を照射して紹介されてきました。したがって「だれでも、いつでも、どこでも、いつからでも」といったスローガンをういて普及しました。そして、多くの自治体で「高齢者の陶芸教室」の写真が掲載され、生涯学習が説明されました。しかし、生涯学習には、1979年のローマ・クラブレポートなどにみられるように、差別、暴力、失業、犯罪、環境破壊、戦争など社会問題を抑止するための社会政策としての意義が示されているのです。学習とは、一般に意識、態度、行動の比較的継続的な「変容」であ

ると言われています。こうして意識変容によって社会を安定させ、活性化していくのが生涯学習という政策なのであります。だから税金を使って生涯学習を振興しようとしているのです。具体的にいうと、たとえば、ゴミの処理には大変なコストがかかります。税金使ってどんどん焼却炉を増設するよりもゴミを少なくする暮らし方に「かえて」もらうことの方がコストが安いのです。税金を大切に使えるということなのです。このように社会にある様々な「かわる」(＝学習)という現象を総合的に活性化していくことによって、様々な社会問題を解決し、安定した豊かな社会を形成していこうとする考え方なのです。地域の文化シンクタンクとしての美術館の社会的な存在意義もそのあたりにキーワードがありそうです。そのまちに美術館があることの社会的な効果ということも学芸員の方々の調査研究の対象にさせていただくと、もっと美術館についての理解が深まるかもしれません。私はかつて『美術館教育研究』(1995.11)という雑誌に「美術館はまちづくりに色を添える自治体のアクセサリではない」と書きました。美術館があることで、その地域にどんな効果をもたらすのか、私たちの暮らしの必需品としての美術館ということを考えてみてはいかがでしょうか。

さて、最後に、私は利用者としての「創造的な美術館のイメージ」を具体的ないくつかの提案を通じて、提示しておくこととします。いずれも素人の域を出ませんが……。

(1) 美術館ネットワーク大学を

北海道には、6つの道立美術館、芸術館がありますが、これらをキーステーションにして、美術館学芸員のネットワークを活用し、道民の学習要求の高度化に対応する学習機会として「北海道美術館ネットワーク大学」のようなものが必要ではないかと思うのです。東京にいて痛感することですが、道外に頭脳流出された方々も含めて、北海道の美術館学芸員の優秀性は全国的にもとても高く評価されています。こうした全国的に見てもレベルの高い道内の美術館の逸材を眠らせずに道民に高度な美術文化に関する学習機会を提供するしくみがあればと考えます。

(2) 展示室での情報提供を

学習情報提供と学習相談についてですが、最近様々な博物館に情報提供を行う機能が付加され、資料室などの名称で図書が置かれ、自由に閲覧できるようになっています。しかし、そこには「地域の住民は、調査研究などしない、専門書などは読まない」と断定しているのかのごとく、普及啓発書や図鑑類しか置かれていないのです。展示をみての疑問に答えるつもりで置かれているのなら、それは全く効果はありません。疑問は、展示(美術品)を見たときに知りたいのであって、展示を見終わっ

てさて、疑問点を解決しようなどということはほとんどありません。必要なのは、一定のルールに基づいた書庫の開放や展示と一体化した情報提供の工夫です。そうした展示室における情報提供の試みとして、東京国立博物館の特別展で試みられた「インフォメーションタワー」(展示室の中央にある様々な情報提供のしかけ)という手法があります。情報と美術品を行ったり来たりしながらなんども美術品を楽しめるのです。展示品の数が少なくても情報によってとても豊かになります。横浜市歴史博物館は、展示室の中央にスタディールームがあり、ビデオ、図書、テーブルを配した相談コーナーなどがあります。情報は私たちの美術品や資料を見るもう一つの目と感じる心を提供してくれます。

(3) 美術館そのものを理解するための特別展を

「美術館」という機関、機能、たてものの仕組み、社会的な意義などを普及する特別展示があればと思います。美術館に係わっていない多くの人々は、美術館についてのイメージは勤務している学芸員と大きく開きがあります。この「開き」が、美術館と文化行政を貧しくしているのかもしれません。かつて滋賀県立琵琶湖博物館が開館したときに、「博物館ができるまで」という特別展が開催され、博物館関係者だけでなく市民にも好評だったようです。博物館は、「展示」という固有の表現方法を持っています。後に残る展示解説書にエネルギーを注ぎすぎて、展示で勝負できないとすれば、悲しいことです。美術館の主張は展示で行ってほしいものです。地域の美術館をネットワークする美術館案内を展示で行う(いわば展示であらわした「〇〇地域の美術館案内」)など、要となる道立美術館にかかる期待は大きいのです。

かつて、伊藤寿朗は、竹内順吉の博物館世代論を継承し、第三世代の博物館を提唱しましたが、それらは基本的には継承するものの、21世紀に対応しうる創造的な美術館を考える際には、第四世代の博物館のイメージを博物館職員自らが創造していくことが必要でありましょう。その際のキーワードとして「市民、社会参加・参画、自立と自己責任、障害者、高齢者、在日外国人などに対するサービス、ネットワーク、地域社会、生涯学習、学校支援、ホスピタリティ」などをあげておくこととします。「博物館は～でなければならない」という既存の博物館イメージに拘束されるのではなく、継続的な自己変革のしくみと、常に新鮮な視点を確保する自律性、公共性が学芸員固有の専門性でありましょう。

* 1998年1月30日の北海道美術館学芸員研究協議会での特別講話を抄録に基づき一部加筆したものです。

平成9年度研究協議会

北海道立近代美術館学芸第二課長

浅川 泰

平成9年度の総会・研究協議会は平成10年1月30日、31日の両日、道立近代美術館で開かれた。

今回の研究協議のテーマは「21世紀の美術館像を探る」であった。平成8年、文化庁は「21世紀を目指した美術館・博物館の振興方策（ミュージアム・プラン）」を打ち出した。これは21世紀における芸術や文化活動の拠点としてのミュージアムの役割を重視し、より魅力的な美術館・博物館づくりを進めるためのプランである。職員の資質の向上、機能の充実、鑑賞機会の拡大、活動基盤の整備など四つの面から具体的な方策が立てられ、国立の美術館・博物館の所蔵品による巡回展、コレクションに関する情報を相互に検索できるネットワークづくりなど国立の美術館・博物館を中心に「ミュージアム・プラン」が進行中である。

文化庁はまた、平成8年から2年間かけて、「21世紀に向けての美術館の在り方に関する調査研究」を実施した。その報告書は、情報化、国際化、高齢化、生涯学習社会への移行などの社会の急激な変化によって、新たなニーズが生まれ、それらに対応した活動を行なう必要があると述べている。その具体的な活動として、情報ネットワークづくり、海外の美術館との交流、ボランティア活動の推進などが上げられている。

こうした美術館をめぐる新しい動きに目を向け、各館の現状を重ね合わせ、共通の問題意識をもつことは重要であろう。

一日目は文化庁の『21世紀に向けた美術館の在り方について』（報告）の概要について、この調査の協力者であった道立近代美術館の学芸第一課長・佐藤友哉が説明し、次に岩内町の木田金次郎美術館の開設準備を担当し、現在企画経済部企画課長をされている大島正行氏が「町おこしと美術館」と題して、美術

館の町づくり効果についての話があった（右写真）。この二つの報告に続いて、北海道新聞社文化部記者の梁井朗氏からの提言「美術記者から見た北海道の美術館の未来」があり、続いて質疑・討論が行われた。



地域住民や行政が美術館に何を望んでいるのか。大島氏が強調した地域経済への効果や梁井氏が指摘した図書や映像など情報サービス面での充実はその一端であろう。「ミュージアム・プラン」は「機能を大幅に拡充し、高度化していくための戦略」として位置づけられているが、その前提として美術館の個性が見えることが大切であり、画一的に考えることはできないであろう。それぞれの館が地域性なり特色なりを一層鮮明にして、どのように連携し、全体として機能を高めていくかが課題となっているのではないだろうか。木田金次郎美術館などが進めている「しりべしミュージアムロード」構想は、ネットワーク化と広域観光が一つとなった新しい試みである。大島氏がいう都市圏など他地域の人々にとっても魅力ある美術館という考え方は情報化・生涯学習社会にあって重要であり、他地域の人々とのコミュニケーションを広げる、さまざまな活動へと展開していくことになるだろう。

近年、美術館でもコンピューターの導入が進んでいるが、一日目の最後に早稲田システムが開発した「3D展示レイアウト・シュミレーション・ソフト」のデモンストレーションを見学した。

二日目は「21世紀の創造的美術館像」と題して、国立教育会館社会教育研修所の専門職員・廣瀬隆人氏の特別講話があった。NPO法（特定非営利活動促進法）や地方分権、生涯学習といった社会の流れの中で美術館・博物館の施設や活動はどう変わっていくのか、住民参加、ネットワーク化、情報機能の充実、ホスピタリティなど具体的に将来の美術館像について話された（本会報に抄録を掲載）。

二日間の研究協議を通じて、学芸員とは違った立場からの報告・提言、また美術館をめぐる最新の話題など、あらためて美術館の役割を考える、貴重な機会になったのではないだろうか。



野外彫刻の新たな試み

—公園を彫刻にする—

札幌彫刻美術館学芸員

井上みどり

本郷新は、1950年東京上野駅前に裸婦像「汀のヴィーナス」を制作した。当時、裸婦を設置することに対して物議をかもしたが、それから50年が過ぎようとしている。今では、全国いたるところに裸婦等様々な野外彫刻が置かれるようになった。

札幌彫刻美術館では、野外彫刻の設置状況を把握すべく、過去に何度か北海道の市町村を対象に野外彫刻実態調査を実施した。この調査をもとに、1997年には「北海道の野外彫刻マップ」を発行している。

調査の結果、北海道には1400点にのぼる野外彫刻が設置されているのがわかった。地域別には、人口の多い地域の設置数が多く、札幌市が全体の27%を占めている。都市計画に野外彫刻を積極的に取り入れている岩見沢市や旭川市は、各市教育委員会が彫刻マップを発行して、芸術・文化都市としてアピールしている。

近年、より積極的に野外彫刻を取り入れている地域に、洞爺湖を囲む虻田町、壮瞥町、洞爺村がある。三町村は、観光地としての特徴を際立たせるために共同で「とうや湖ぐるっと彫刻公園」構想を打ち出した。設置された野外彫刻は、全部で58点。作品選定に当たっては、専門家を中心に設置委員会を設立、日本を代表する作家や北海道在住の作家に制作を依頼している。ほとんどの作品は、作家が設置場所に赴き、地形や景観を確かめた上で制作された。何れの作品も洞爺湖を背景とした環境に調和し、訪れる人の目を楽しませている。

設置場所別で見ると、道内市町村に新設された大部分の公共施設や公園の前庭などに野外彫刻が設置されている。最近では、マンションや新興住宅街などの空間にも彫刻が置かれるようになった。また、学校の記念事業の一環として校庭に置かれる場合も多くみられる。これらの例は、公園や前庭など既に設置すべき場所が決まった段階で制作依頼していると思われる。一部、彫刻家が建築家と設置する場所について事前に協議することもあるようだが、殆どが周りの空間ができあがった所に彫刻を設置している。

最近札幌市では、設置すべき空間づくりから彫刻家が参加し作品を制作した新しい試みがある。「石山緑地公園」と「モエレ沼公園」である。

石山緑地は、かつて建材として使われた札幌軟石の採石場であった。1977年、周辺地域の市街化に伴い粉塵等の問題が生じ、閉鎖された。放置された跡地は荒廃が進み、札幌市の手で公園化の計画が持ち上がっていた。一方、5人の彫刻家が札幌で彫刻シンポジウムを開催すべく、札幌市などに働きかけをしてい

たという。ここに、行政と作家が出会い、約8haの石山緑地の公園化がスタートした。

1992年に行政（環境局緑化推進部造園課）と彫刻家そしてランドスケープデザイナーによって着手、6年をかけ1997年に完成した。参画した彫刻家は、國松明日香、永野光一、松隈康夫、丸山隆、山谷圭司の北海道在住の5人である。彼等は、それぞれ個別に作家活動をしているが、石山緑地は個々に彫刻作品を置くのではなく「場」そのものを生かそうとした。そのため、共同制作グループC I N Q（サンク）をつくり、基本計画からすべてに参画した。

公園化の基本コンセプトは、サンクの意見を参考にして以下のようにまとめられた。

- ①石切場の景観を最大限に利用する。
- ②石のふるさと「石山」を再発見できるような公園とする。
- ③彫刻に親しむため、公園全体を彫刻とする。ゾーンごとの関連性を持たせ、プレイスカルプチャーやファニチャー類を彫刻家が制作デザインする。公開制作を通し市民参加を実践する。
- ④危険箇所には、景観に調和した安全対策を行う。

完成した公園は、4つのゾーンに分かれている。

①エントランスゾーン

北側の入口に「呼吸する門」があり、ゾーンのシンボルとして高さ11メートルの「スパイラル・スプリング」がある。これは、浸水性の強い宮城県産伊達冠石を使い、大地から水が湧き出し螺旋状に水が流れ落ちる造形物である。そして、流れ落ちた水は螺旋を描いた小さな水路となり、周辺に配置された石と金属の造形物とともに、子供達が登ったり、ふれられる空間になっている。

②沈黙の森

既存の白樺林を生かしつつ新たな植栽を加えて、自然に近い風景が感じられる場所である。自然の色彩の中に、強烈な印象を与える真っ赤なジャングルジムが軟石の岩肌を背景に置かれている。それが、公園のアクセントとなっている「赤い空の箱」である。

③ネガティブマウンド

周囲の切り立った空間と対比するように中央部分はくぼみを表現した石の造形。ここは、植栽はせず軟石だけで構成された渾身の空間である。まるで、古代遺跡の中に迷い込んだような不思議な思いにかられる。まさに、彫刻家が参加したからこそ実現した非日常的な空間である。ここでは、石山緑地芸術祭が毎年行われイベント会場にもなっている。

④午後の丘

垂直な壁に、巨人がつけたような幾筋もの傷と立方体の穴がある。地面には、壁から抜け落ちたような立方体が無数に転がる不思議な空間。他に、「砦」と称した穴や数段の階段があり、プレイゾーンとして楽しめる。

公園造成期間中、何度か作家による公開制作と子供達を対象とした石彫教室が開催された。シンポジウム開催を望んだ作家の思いが、実現したのである。

公開制作は、彫刻というだけで身構えてしまう人々に、理解を与える絶好の機会となった。公園作り担当者にとっては、市民の好意的な反応が完成に向けて確信となったようだ。

公園内の空間に置かれたものは、全てサUNKのアイデアが生かされている。落石防止のフェンス、トップライト、フットライトなどの照明灯、水飲台、ベンチ、四阿などは、この場にふさわしいようにデザインされている。ひとつとして同じ形の物がなく、微妙に異なったそれらを見るだけでも、楽しくなる。

「石山緑地公園」が、これまでの公園の概念とは全く異なった空間となりえたのは、やはり彫刻家の参画が大きい。そして、彫刻家の参加を認め、全面的に協力した行政側の理解があってこそ、実現したことが高く評価されている。

公園内に彫刻を設置するのは、これまでどこでも見られた。彫刻そのものの質に関わらず、設置それ自体が優先され、時にはまち全体の調和がないがしろにされていたように思う。このままでは、「彫刻公害」を引き起こす可能性を否定できない。これからは、量から質の時代を迎えているのではないだろうか。

「石山緑地公園」は、公園という空間そのものを彫刻にした、注目すべき実践例であろう。

もうひとつ札幌市には、彫刻家が参画した公園がある。内陸部約100haの周りを取り囲むモエレ沼の水面を含めた184haのごみ埋め立て地を公園化する、「モエレ沼公園」構想である。広大なスケールの公園づくりは、世界的な彫刻家イサム・ノグチが全面的に協力することになり、全体指揮をとることになっていた。承諾を得た矢先、9ヶ月後の1988年12月イサム・ノグチは急逝したが、遺志を継いだ人々によって公園作りは続けられた。

そして、主要施設が半数以上完成した1998年7月5日オープン式が行われ市民に開放された。

イサム・ノグチは、これまでいくつか公園作りに参加していたが、「モエレ沼公園」を「大地全体をひとつの彫刻とした公園」構想の集大成と考えていたようだ。

「モエレ沼公園」の基本コンセプトは、彼の設計思想を基本としてつくられた。

①公園を小さなゾーンの集合体と考えず、全体をひとつの造形物とする。

②周りの環境や景観との調和を重視する。

③象徴的な空間を創造し、ダイナミックな地形の造形を行う。

④演劇や音楽などの芸術・文化活動、多様なスポーツ活動が開催でき、冬季間のレクリエーション活動が可能な空間や施設づくりを行う。

⑤水を生かした水辺のレクリエーション活動が活発にできる公園にする。

現在「プレイマウンテン」「徒渉池」「テトラマウンド広場」「ミュージックシェル」などが完成している。遊具エリアは、計算された美しさと機能性を持ちつつ、芸術性にあふれた彫刻ともいえる造形物で構成されている。子供達のための公園造りを構想した、彼の思いが十分に生かされている。

そして、子どもだけではなく大人にも楽しめる魅力的な公園になっている。広い敷地内を実際に歩き、様々な立体造形によって変化する空間を体験できる。

全面完成するには、予定ではあと5年かかる。完成した2004年、札幌市は世界に誇れる公園を持つこととなるだろう。

今後の野外彫刻を都市計画として考える場合、「石山緑地公園」や「モエレ沼公園」は、新しい試みとして注目に値すると思う。

参考文献

八木正巳「石山緑地（南ブロック）について」『公園緑地』57号 日本公園緑地協会（1996.5.）

パンフレット「石山緑地」「モエレ沼公園整備計画」札幌市環境局緑地推進部造園課

美術情報コーナーの検索システム

芸術の森美術館学芸員

吉崎 元章

芸術の森美術館では、1999年4月29日から新しい「美術情報コーナー」を試験的に公開している。これは、コンピュータを用いて、芸術の森美術館の所蔵品や北海道の野外彫刻が検索できるシステムであり、ビデオ上映や札幌芸術の森ホームページ閲覧機能なども備えている。現段階では一部のみの公開であるが、今後利用者の意見などを取り入れながら充実したものとしていく予定である。ここでは、開設までの経緯とシステムの構想を報告する。

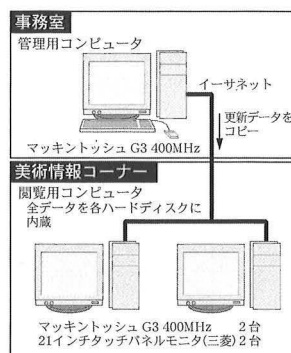


図-1 ハード構成

芸術の森美術館では、1990年9月の開館時にすでに館内の一角に21インチモニタ上でビデオ、レーザーディスク、スライドによる番組を選択して閲覧できる「美術情報コーナー」を設けていた。ビデオデッキ3台、スライド映写機3台、LDプレーヤー1台を備え、最大10番組を提供できるものであった。しかし、8年以上が経過し、オリジナルの番組製作がままならないまま、数少ないビデオテープは度重なる再生のため劣化し、また機器の老朽化により故障が頻繁に起こるようになってきていた。そうしたなか、昨年、収蔵庫の増築工事がはじまり、新しい収蔵庫への通路上にあたる「美術情報コーナー」が移設されることになり、それに合わせて陳腐化してきたシステムを一新することとした。

常設展示室を持たない芸術の森美術館では所蔵品を展示する機会が限られており、この収蔵庫増築において、作品を保管しながら一般に作品を公開する方法について検討された。収蔵庫の一部をガラス張りにして棚に展示する方法や通路に数点の作品を展示するコーナーを設けることなども論議されたが、不完全な形で作品展示となることや、収蔵スペースをできるだけ広く確保するという本来の目的を犠牲にしてまで別利用することに対する疑問もあり、実際に作品を展示することは見送られた。それに代わってコンピュータの画面上ではあるが、美術館の顔とも言うべき所蔵品についていつでも知ることができるシステムを構築することになった。

■収蔵作品検索システム

幸い、芸術の森美術館では「ファイルメーカー」というアプリケーションを用いて所蔵品を画像付きでコンピュータ管理しており、これを一般閲覧用にデータを変換することはそれほど難しいものではなかった。プログラミングを行う業者決定は入札によることとなったため、事前に詳細な仕様書を作成しなければならなかったが、このなかで最も留意したことは、我々のみで自由に柔軟にレイアウトやシステムを変えることができるものであり、その発展性であった。作品の追加や文章の書き換えなども簡単に行えるものとした。そのため、使い慣れた「ファイルメーカー」をベースに構築することを希望したが、公開ま

での日程の都合上、別のデータベースソフト「4th Dimension」をベースに開発されることになったのはいささかの不安要素である。

公開に向けて最も問題になったのは、著作権についてである。近年デジタルアーカイブが盛んに取りざたされ、シンポジウムが頻繁に開かれているが、いつも著作権が話題となる。著作権法が制定された頃にはこうしたデジタル化についての概念はなく、館内だけかインターネット上での公開か、あるいは商業的なものかどうかを問わず、現行法上は著作権者に写真使用の承諾をすべて得なければならない。そのため、作家及び遺族に契約書を送付し承諾を得ることになったが、契約書の返信が未だない作家や、著作権者が分からない場合も多く約3分の2の承諾が得られたのみであり、画像が表示できないままになっている。

システム開発の関係上、当初は作家名、作品名などからの検索のみになるが、近いうちに「明治以降の木彫」「どうぶつ大集合」などあらかじめ設定したテーマから作品を見ることができるようになる予定である。また、このテーマは、実際に開催した収蔵品展や今後計画しているものの内容をも反映させたものとして加えていきたい。

■北海道野外彫刻検索システム

新しい美術情報コーナーのもう一つの目玉は「北海道野外彫刻検索システム」である。札幌彫刻美術館の井上みどり学芸員が調査、編集したデータの提供を得て、北海道内の約1,400点の野外彫刻を作家名や場所から検索できるものである。このシステムのもとになっているのは、1997年に札幌彫刻美術館が発行した「北海道野外彫刻マップ」であるが、印刷業者によってデータがデジタル化されていたため、検索システムに容易に活用することができた。また、このシステムでは作品の多くを画像付きで表示する予定である。北海道内の野外彫刻を数多く撮影している仲野三郎氏（札幌芸術の森野外美術館解説ボランティア）の写真を使用するものである。なお、野外に設置された作品写真の使用については法的に著作権者の承諾を必要としない

ことから申請は行っていない。当面は、文字と北海道地図からの検索であるが、将来的には市街地地図と連動したものにしていきたい。

■ビデオ上映

これまでの情報コーナーの機能を踏襲するため、コンピュータの画面上に動画を表示することとした。デジタル化しているため画像の劣化はないが、現段階ではコンピュータの画面上に動画を表示する技術は発展途上にある。画像を圧縮しているため、観覧にはそれほど影響がないレベルではあるが、早い動きの時に四角いノイズが多少出てしまう。いくつかの方式を試したが、ここではQuickTimeのソレンソン圧縮したものを表示サイズを2倍にして上映しており、15分のビデオで約600MBを有している。動画圧縮、再生技術が急速に発達してきているため、近いうちに方式を変更することになるとと思われる。

■ホームページ

札幌芸術の森では4月からホームページを一新した。これまでのものはデザインに凝りすぎて表示速度が遅かったため、見やすさを追求した構成になっている。札幌芸術の森の各施設案内や月2回更新される最新情報などが網羅されているため、このホームページをシステムに加えることによって、来館者にとって札幌芸術の森の有効な情報を提供できるものとなるだろう。

■ハード構成

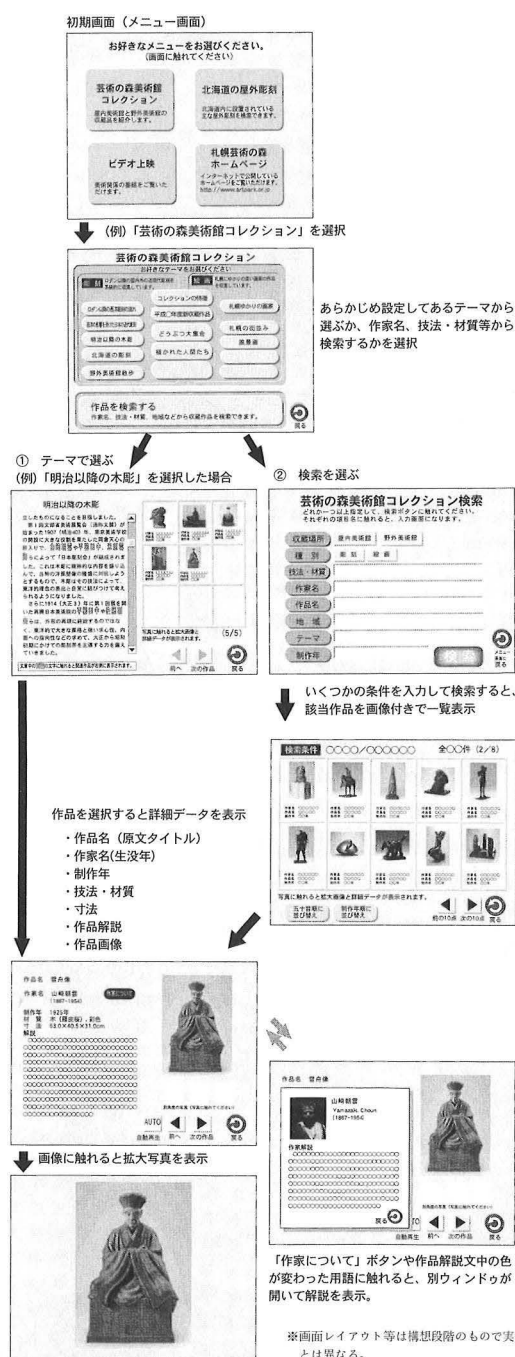
芸術の森美術館では、事務処理や学芸業務において開館以来マッキントッシュコンピュータを使っている。このためこのシステムでも、日常管理の面から使い慣れたマッキントッシュコンピュータを導入することとした。また、近年コンピュータが普及したとはいえ、マウス操作が不得意な人たちも多いと思われるため、モニタ画面に触れて項目を選択していくことができるタッチパネルモニタを導入した。また、このシステムでは、同じ全データを各コンピュータがハードディスクに個別に持っている。当初、サーバとなるコンピュータを設け、そこから各コンピュータがデータを読み込んで表示する方法も検討した。この方法では、サーバ内のデータを更新するだけですべてのコンピュータで最新の情報を表示できるという利点がある。しかし、サーバに異常が生じると、すべてのコンピュータが使用不可能になるという危険性も持っている。また、動画などデータ量が多い場合に、スムーズな表示ができないことも考えられる。このため、台数が少ない芸術の森美術館のシステムでは、イーサネットをつなげた事務室にある管理用コンピュータ（普段は事務用として使用）から更新データを美術情報コーナーの各コンピュータにコピーすることにした（図-1参照）。

試験的に公開し、利用者の反応を見てみると、ほとんどが説明を読まずに画面に触っていた。たとえば検索項目を選んだ後に「検索実行」ボタンを押すようになっており、その操作方法

を画面上に大きく表示しているが、それに気付かない人も多い。今後、直感的に操作が分かるように改善していかなければならないが、多機能化とやかに融合させるかが今後の課題である。

また、今後はコンピュータという特性を生かし、美術に親しんでもらえるインタラクティブな新たな番組をつくる計画もある。

図-2 画面の流れ



ピカソ美術館を訪ねて

——研修報告

財団法人荒井記念美術館学芸員

釜沢 恵子

渡仏に至るまで

1995年に、京都国立近代美術館で開催された『ピカソ 愛と苦悩—「ゲルニカ」への道』展のオープニングで、パリのピカソ美術館の学芸部長、エレヌ・ラサル氏に会ったのがきっかけで、パリのピカソ美術館で版画の作品調査をしたいと思いついた。翌96年、当館で開催した『版のアヴァンチュール：ピカソのリノカット版画展』の作品解説、更に97年に函館美術館で『ピカソ「愛とエロチシズム」ピエロ・クロムランク版画コレクション』展の折に講話を依頼されたが、いずれも、作品についての調査の限界を強く感じた。

ピカソの版画の基本文献として、George BlochのCatalogue Raisonnéがあるが、これは、版画作品の履歴的なデータの集積であり、版画の制作プロセスや刷り師等の記述がない。一方、Brigitte Baerのものには、それらの詳細な調査記録があるが、この文献を所有している美術館が日本ではまだ少ない。ちょうど、メルシャン美術館の主任学芸員の岡部あおみ氏が当館にピカソの作品の所在調査にみえたので、彼女にパリのピカソ美術館の現学芸部長のBrigitte Léal氏を紹介していただき、直接、調査依頼の手紙を出し、今回の研修が実現できたわけである。また、アンティープのピカソ美術館は、館長のMaurice Fréchuret氏を東武美術館の岸本氏からご紹介いただいた。

パリのピカソ美術館

一連のピカソ美術館での調査の主な目的は、ひとつには各館の版画と原版の所在調査であり、もう一つは版画に関する文献や論文、手紙や写真などの一次資料の調査であった。そして、できれば、版画工房の取材調査もしてみたいと考えていた。

パリでは、文書課のJeanne-Yvette Sudour氏にお世話になった。版画は、学芸課ではなく、文書課の管轄だったのである。もちろん版画担当の学芸員はいるが、作品の管理は、写真や手紙などのドキュメントと共に文書課で取り扱い、収蔵庫で作品を閲覧する際も彼らが立ち会った。折り悪く、版画作品のほとんどは台湾とスペインのバルセロナのピカソ美術館に貸し出し中で、今回は30点ほど閲覧できたにすぎない。パリのピカソ美術館所蔵の版画にはMPマークがシートに刻印され、その多くは初版、もしくはピカソ自身の刷りや試し刷りも含まれ、また、原版も多く所蔵している。館の紹介によると、1,600点以上版画を所蔵しており、2,022点とG.Blochのカatalogue・レゾネで数えられている総作品数の実に8割にものぼる。

文献調査のほうは、B.Baerのカatalogue・レゾネによって、



バルセロナのピカソ美術館

当館所蔵の267点のピカソ版画もいつ、誰によって刷られたものかがよくわかったし、ますます、初版と原版を直に見てみたい欲求にかられた。

学芸員のDominique Dupuis-Labbé氏から、La Bibliothèque nationale de Franceにピカソの版画の最終版が揃っているのを見に行ったらどうかと勧められ、その写真と版画のセクションとなっている図書館で3日間で約500点は閲覧できたと思う。

パリには約1ヶ月滞在したが、残念ながら、版画工房の取材はできなかった。語学力不足もあったが、展覧会や購入を前提にしていると難しいとのことで、今回は基本調査に専念し、断念せざるを得なかった。

バルセロナのピカソ美術館

バルセロナには、わずか4日しか滞在することができなかったが、パリのピカソ美術館から貸し出されていた版画の初版や試し刷り、原版、ステートの違いによる幾通りものヴァリエーションが分かりやすく展示され、ピカソが刷り師との共同作業によって、どのように版画の刷りを繰り返していったかが見通せる効果的な展示をしていた。＜貧しい食事＞の初版、再版、更に原版もあり、その比較が容易にできた。ここでも文書課の方にお世話になったが、時間があまりなかったため、Christian Zervosの総作品目録全巻を閲覧した。しかし、文書課のLluís Bagunyà氏によると、Zervosの総作品目録も、現在では、抜けている作品があることが知られており、その再調査が行われ、1995年からThe Picasso Projectということでアメリカの画廊が中心になって、ピカソのキュビスム以降の作品総目録の再編纂がなされていると聞いた。

版画の場合、一つの原版から、エディションの違いによって

一つ一つ刷りの仕上がり異なる場合もあり、どのように区切って作品を数えるかが、研究者の見解の相違と言えそうである。また、原版を一度使用した後、更に別の作品に流用することもあり、リノカット技法などで、その転用例がカタログ・レゾネに記載されていた。

パリのピカソ美術館はピカソの死後、遺産相続的な形でパリ市に寄贈された作品とピカソ所蔵のマチスやルソーなどの作品を系統立てて展示しているが、バルセロナの場合は、ピカソの友人で秘書もしていたハイメ・サバルテスが館長となり、所謂初期の油彩やデッサンなど「ピカソ以前のピカソ」を知る貴重なコレクションを所蔵し、版画もピカソ自身が友人サバルテスへと直筆で書いたサインが施されており、MPB マークが各作品に刻印されていた。

アンティープとヴァロリスのピカソ美術館

南仏ニースには、マチスとシャガールの、またマントンにはジャン・コクトーの美術館があり、プロヴァンス地方の小美術館を観光して回るには便利なコートダジュール美術館パスというものがあり、このパスを利用して大小さまざまな美術館を見て回ることができた。

アンティープでは、主に文献調査に終始した。16冊程の欧文文献を閲覧したが、館蔵品の目録、企画展図録、作品分析的なものに分けられるようだ。館蔵品については、カタログ・レゾネと作品の制作プロセスを詳細に調査したもの、企画展図録は、ピカソへのオマージュとして現代作家によるものとパリやバルセロナとの共同企画展などが多い。また、ヴァロリスが近いためここにも陶芸作品が収蔵されていることもあってか、Alain Ramié と Georges Ramié による陶器のカタログ・レゾネと作品集があった。また、ここはピカソが生前アトリエとしても使っていた建物のため、階段にはピカソの制作風景を写した写真も飾られていた。

館長の Maurice Fréchuret 氏は気さくな方で、図書室が手狭なため、館長室で文献の閲覧をさせていただいた。この美術館には、ピカソの他にニコラ・ド・スタールの作品もあり、他にもクロード・ヴィアラなど20世紀の現代美術のコレクションも収蔵しており、それらの企画展も随時開催されているようだ。

この美術館では、ピカソの版画作品の閲覧は日程の関係でできなかったが、館蔵品目録によれば、リノカット作品を数多く収蔵している。

ヴァロリスは、事前に調査依頼の手紙を出していなかったこ

とと、版画関連の作品が少ないこともあって、美術館を見学するに止まった。アンティープからバスで30分程と近いこともあり、ただ1点「戦争と平和」を所蔵するピカソ美術館と陶芸美術館を見学した。ここにはしかし、リノカットプレス機が展示されており、陶芸とリノカットの制作を主に南仏でピカソが行ったためと推測される。

研修調査を終えて

わずか2ヶ月間の調査であったので、まだ終わった感がしないのが実感である。いずれのピカソ美術館も、ピカソが生前、生活し、制作していた場所にある。そうした、ピカソがどのように暮らし、制作していたか、もっとピカソの足跡を訪ねて歩くこともできたかもしれない。いやそうすべきだっただろう。また、ピカソの美術館として、5年、10年、更に長く存続していくために美術館はどのような展覧会や活動を展開しているのかにも興味があった。コレクションの充実、企画展の可能性など、当館もピカソの版画コレクションを目玉にしている関係でやはり気になった。

世界中のどこかでピカソの展覧会はいつも開催されているようにも見えるし、またピカソの作品研究はし尽くされた感もあるかもしれない。しかし、アメリカの The Picasso Project がピカソの総作品目録の再編纂を試みるあたり、まだ、調査の余地があったことに驚き、不勉強を恥じる次第である。

また、パリのボンビッド・センターが現在改修工事中であったが、一部開館して、デービッド・ホックニーのグランドキャニオンを主題とする新作の展覧会を開催し、この展覧会に連動するかたちでピカソ美術館でホックニーの展覧会が開催されることを知り、それがオマージュとしてのものなのか、また違った観点で開催されるのか興味を持った。残念ながら、帰国後にオープンということで見ることはできなかった。

今後の展開

当館は今年、開館10周年を迎える。今までは当館のピカソ版画コレクションを入れ替えて常設展示を行ってきたが、今後できればコレクションの貸借を通して、もっと幅広い展示の可能性を模索したい。また、今年度は、今回の研修調査の成果を常設展と講座の中で、ご紹介したいと思っている。

ピカソ美術館三館を訪ねて、知り合うことができた各館の学芸員や文書課の方々とのパイプを大事にしていきながら、ピカソ研究を今後も継続していきたい。

北海道立釧路芸術館

学芸課長

地家 光二

北海道立釧路芸術館は、北海道とくに釧路・根室地域の芸術文化の振興を図るための新たな文化施設としての設置が決まり、平成8年夏着工、平成10年3月竣工、同年10月24日に開館しました。

すでに道立の美術館として、近代美術館、三岸好太郎美術館、旭川美術館、函館美術館、帯広美術館の5館がそれぞれ特色ある活動を続けていますが、それらに当館が加わることであります。ただし、当館は「芸術館」という名称で、道立美術館とは異なる道立博物館条例による設置となっていますが、実質的には美術館機能を中心とした活動と役割を果たすことを基本とし、さらに広がりを持った活動も行えるものと考えています。館の管理運営は、北海道教育委員会から財団法人釧路市民文化振興財団に委託されています。ただし常勤職員7名のうち6名（学芸課3名）は道教委からの派遣です。初代館長（非常勤）には北海道教育大学名誉教授でピアニストの荒谷宏が就任しました。

当館は釧路市の都心部に近い幸町4丁目に建ち、釧路駅から徒歩で10～15分ほど、市内観光スポットにも近く、都市型の立地ということができます。建築設計は、平成6年に行われた構想設計競技（コンペ）で最優秀となった象設計集団によるものです。鉄筋コンクリート造一部2階建、外壁煉瓦積（一部コンクリート打放）のユニークな建築で、開放的な印象を与えます。展示室（739㎡）は1室。北側に位置する倉庫風に見える4棟続きの部分で、小屋組の鉄骨の梁をあらわしとし、天井高は10－3m、壁面は白塗りの煉瓦壁、白木の床、幅44m奥行15mの細長い室内に12本の円柱（煉瓦積）を配した独特の展示空間です。このほか、音楽会や映画会、各種公演などに利用できる約200席（固定席125、可動席76）のアートホール、小規模な展示壁面も持つフリーアートルーム（115㎡）、2階の喫茶コーナー、閲覧コーナーなどがあり、高い吹抜けのロビーや外部のオープンテラスも特徴的です。喫茶や売店では芸術館ボランティアの会＜SOA＞が運営を行っており、同会では資料整理や広報活動に取り組んでいます。

館の要となるコレクションについては、＜映像芸術＞＜自然と芸術＞＜地域と芸術＞を収集方針の基本として、写真などの映像作品、自然をテーマとした作品、釧路・根室地域等と関連する作品などの収集を進めていくものです。収集は平成10年度から始まったばかりで、現在、岩橋英遠、千住博、羽生輝、上田薫、扇谷章二、東理次良、秋岡美帆、岡部昌生、アンセル・アダマス、川田喜久治、田原桂一、長倉洋海、深瀬昌久、森山大道、林範親、舟越保武、アルナルド・ポモドーロ（前庭モニュ

メント）といった作家の23作品を収蔵しています。このうち約半数は釧路芸術館建設協力会、釧路しんきん地域振興基金など地域の方々からの寄贈によるものです。今後も特色あるコレクションの形成をめざす予定です。これらの収蔵作品の展示は常設ではなく、所蔵品展として会期を設定してご覧いただくことになります。

その所蔵品展を含め、展覧会事業は多彩な分野にわたっての開催を考えています。これまでの開催企画として、開館記念の「ベルギー・ゲント美術館展」、自然の要素をテーマとした「アート・オン・エレメント」、初めての所蔵品展「釧路芸術館ミュージアム・コレクション」があり、平成11年度は「ワダエミの衣装展」「岩橋英遠展」「アンセル・アダマスの世界」「現代日本のグラフィック・デザイン」「グラネ美術館展」「所蔵品展」を予定しています。

展覧会ばかりでなく、＜ミュージアム・コンサート＞＜パフォーミングシアター＞＜映像アートフェスティバル＞＜アートシネマ館＞といった、音楽や舞踏、映画などの分野の芸術を独自の視点から紹介する企画も開催しているほか、講演会やワークショップ、子供向けのプログラムなどの普及事業も適宜実施します。昨年度のワークショップでは、小川忠彦氏によるトーストアートの制作や、中江紀洋氏と参加者によるコラボレーション「くっ！くっ？くっ★」（古靴を素材とした造形作品の制作）などを開催しました。

このように歩み出したばかりの釧路芸術館では、美術館機能を基本にしながら各種の事業に取り組んでいくものですが、時に逸脱し、時に錯誤しつつも、ユニークな企画を試みていきたいと思っています。具体的な活動の積み重ねのなかから、この「芸術館」の姿が見えてくることと考えています。



北海道立釧路芸術館外景

市立函館博物館

学芸員

霜村 紀子

市立函館博物館の歴史は、明治12年（1879）5月25日に開拓使函館支庁仮博物場の開場から始まり、昨年120周年を迎えました。開拓使顧問ホーラス・ケプロンが北海道の開拓には博物館が必要であると提言したことにより、明治9年東京出張所仮博物場、翌年札幌に偕楽園内仮博物場、次いで函館支庁仮博物場が開場しました。

この建物は一号館と呼ばれ、明治17年に建てられた二号館と函館県第二博物場とともに、現存する最古の木造洋風建築の地方博物館として、北海道有形文化財に指定され、函館公園内に保存されています。当館の講座「SPレコードを聴こう」は、一号館を会場に開催され、市民の方は蓄音機の奏でる音を聴きながら明治の雰囲気にはまっているようです。

博物場は、明治15年開拓使の廃止にともない函館県に引き継がれ、明治19年の三県廃止により北海道庁、函館区役所へと移管されました。その後、大正11年（1922）の市制施行より函館市所管となります。戦後、昭和23年（1948）に市立函館博物館設置条例が定められ、博物館の建設が待ち望まれていました。

現在の市立函館博物館は、昭和41年4月28日に総合博物館として開館し、五稜郭分館、郷土資料館を加え、3館で運営しています。

企画展示は年3回、本館において特別企画展、新収蔵資料展、分館において特別展を開催しています。基本的には、函館・道南地域の出来事やゆかりの人々をテーマとした自主企画です。今年度の特別企画展は、函館生まれの漫画家・岡本一平を取り上げ、「漫画界の総理大臣 岡本一平」を6月1日より開催します。

普及事業では、単講座約20回、通年講座（天体観測・自然観察）2種を主催していますが、今年度から新しい試みとして、「体験する土2.4 講座」を設けました。これは小中学生の第2・第4土曜日の週休に対応したもので、来館した子どもたちが随時、昔のおもちゃを手作りしたり、博物館の資料に触ったりできる体験講座です。

収蔵資料は考古、歴史、民族、民俗、自然、美術工芸と幅広い分野にわたり、大半は函館周辺の遺跡から出土した遺物ですが、全体で約77万点と膨大な数になります。函館市にはテーマ別の資料館が多数あるため、当館の資料は各館で活用されています。五稜郭関係資料は五稜郭分館、民族資料は北方民族資料館、北洋漁業資料は北洋資料館、写真資料は写真歴史館、梁川剛一資料は文学館において常時展示しており、当館は資料管理・保存の中核的な役割を果たしています。



市立函館博物館本館 外観

本館の常設展示は、ロビーでは博物館の歴史、第一展示室では道南の自然と考古、第二展示室では美術、第三展示室では函館の通史をそれぞれ紹介しています。

美術工芸資料は、寄託資料含め約3000点を収蔵しており、日本画・陶磁器などの花光コレクション、鐔・小道具の堤コレクション、梁川剛一資料など個人の収集家や作家から一括寄贈・寄託されたものが多くを占めています。なかでも、松前藩の家老であった蠣崎波響とその弟子たちの作品、幕末・明治期のアイヌ風俗を描いた絵画、函館・道南ゆかりの画家による油彩画は、対外機関への貸出が多く、館として収集に力を入れているところでもあります。

美術の常設展示は、「戦争と美術」「蝦夷地の風景」など随時テーマを決めて収蔵資料を紹介しています。現在は、「鎌田俳捺子小品展—師橋本三郎の作品とともに—」と題して、鎌田俳捺子氏より御寄贈いただいた新収蔵作品を展示しています。

博物館の美術分野は、地域性や制作の歴史的背景あるいは記録性など、作品自体の美という基準だけでは計れないものが幅広く含まれます。また、例えば絵画と描かれた動植物、アイヌ絵とアイヌの民具、古地図と風景画など他の分野と融合することができます。

今後は、博物館という種々雑多な部分を生かし、来館者の方々に楽しんでいただける展示を心がけていきたいと思っています。



美術展示室

網走市立美術館

学芸員

古道谷朝生

網走市立美術館は1972年(昭47)に故・居串佳一の遺作38点の寄贈を受け開館しました。当時は道内に北海道立美術館がただで市立の美術館としては道内初でありました。

網走の美術は北海道庁立網走中学校の美術部『白洋(楊?)画会』より始まったといっても過言ではありません。美術教師須貝燐太郎、角田友弥(星湖)らの指導のもと第1期生である高橋道雄らによって創立されました。第2期生は道展、日本水彩画会で活躍する納直次がいます。時をほぼ同じくして札幌にて林竹治郎に学んでいた宮本金次が代用教員として網走に赴任します。放課後に水張りされた画用紙をイーゼルに立てかけて写生する姿は、当時小学生であった水野(居串)佳一の目には鮮烈に映り、放課後には他の子どもと一緒に屋外で草花や風景をスケッチしていました。そして中学生になると迷わず美術部に入ることになります。5年生である高橋道雄は卒業後に美術学校進学のため川端画学校に入り、東京美術学校(藤島武二教室)に進学します。高橋道雄と同じく1期生には佐藤信勝がいるのですが、中学当時は絵を描いておらず、後に朝倉力男等の影響で絵画に傾倒していくことになります。終戦後に宮本金次、居串佳一らで『潮画会』が結成され、後の『北線美術協会』へとなっています(初代会長には佐藤信勝)。網走の美術は今後この潮画会が中心となっていきます。一方網走管内では北見に『全北見美術協会』ができ、管内唯一の公募展として重要な位置をしめるようになります。

網走市立美術館の常設展には、郷土出身作家作品やその周辺の作家作品、当地にゆかりのある作家作品、オホーツクの地方に画題を求めた作家作品などを展示しております。

移動展では毎年5月に様々な全国規模の児童画のコンクールより選抜された『楽しい子どもの美術展』が開催されます。当館開催後、作品は清水市フェルケール博物館、四国の町立塩江美術館を巡回します。その他にも書道では『北海道書道展-網走移動展』や、写真では『写真道展・学生写真道展-網走移動展』、『全国教育美術展』などが開催されます。全国教育美術展は、1年をかけて網走管内の公民館を巡回しています。

普及事業では、特別展での作品解説会、美術講演会を開催しています。作家自身による「自作を語る」形式での解説会では、会場よ

り作品についての積極的な質問がとびだすなど鑑賞者の熱意がうかがえます。7月下旬にはオホーツク水族館での『夏休み写生会』が行われ、作品は当館にて展示されます。オオカミ魚やトド、ラッコやクリオネなどが画面の中に踊りだす元気いっぱいの作品です。実技講座では『デッサン会』が開かれ、20名ほどの受講者が基本からのデッサンを学んでいます。幾何形態から静物までの鉛筆デッサンで画面の構成やバルールなどの絵画要素を学び、昨年は11回の講座を開講しました。毎年開催されるオホーツクアートセミナーでは、音楽部門と美術部門があり、美術部門では描画講座、デザイン講座等で美術大学より講師をお招きしての開催となります。その年によって人物画や静物画、風景画、抽象画へのプロセスなどが描画講座では開講されました。デザイン講座では色の基本から紋様やマークの作成、テキスタイルの可能性、絵本の制作などが行われました。

網走市立美術館では、常設展、企画展の他に市民ギャラリー的な側面もあります。文化の秋にもなりますと『市民文化祭』が行われ、『市民華道・盆栽展』『市民書道展』『市民文芸展』『市民美術展』『北のデザイン・工芸展』『子ども創作展』などが開催されます。

1年を通じて様々な催しが行われておりますので、皆様のご来館をお待ちしております。



網走市立美術館外景

